

子どもたちの学びと経験

—安全を前提に『何もなかった』ことを誇りにする—

土橋一智（社会福祉法人龍美 ハッピードリーム鶴間 園長）

1. プロフィール

東京都町田市にある社会福祉法人立認可保育所「ハッピードリーム鶴間」の園長。

ハッピードリーム鶴間は0歳児から就学前児童までを受け入れており、本園及び分園を合わせて定員142名。園の方針として「体験からの学び」を大切な幼児期教育のひとつと考えており、市街地にある施設ではなかなか体験できない自然体験、川遊び等を通してその楽しさと危なさについて川遊びの体験をする中で子どもたちが学びを得られるような取り組み「年長児リバーキャンプ」を実施している。

2. 保育施設における主な水の体験

保育施設に通う乳幼児期に水に触れる機会として、各施設それぞれではあるが、主に泥遊び、水浴び、プール活動、川での活動、海での活動がある。この中で、施設側の安全配慮が特に必要なのがプール活動や海川での活動である。

3. 水の体験活動における必要な安全管理体制

近年、子ども関連施設における様々な事故が多く報道されている中でも「水の事故」については死亡あるいは重症化リスクが高くなる。このため、国のガイドライン等も定められ、園でのプール活動時には、保育に入らずに見守り監視のみを行う専任の職員を配置するなど監視体制などは厳格に定められている。

一方、各子ども施設が独自に行なっている海や川を利用した園外活動での安全管理対策については各施設の安全配慮や意識によってくる比重が大きい。

4. 当施設で行う「年長児リバーキャンプ」の内容

ハッピードリーム鶴間では、5歳児クラスの夏時期に一泊二日のリバーキャンプを行なっている。参加人数は24名程度、引率者は7人以上の体制で行い、保護者参加は無いことを前提としている。活動の内容と目的は様々あるが、その中で水の体験については楽しく川遊びをする中で水の特性（水温で体を感じる感覚・

流れの強さとその抵抗がどれくらいなのか、どれくらいの水深で流されてしまうのか等）を、自らの体験を通して感じて学んでいる。特に近年は保護者自身も自然体験をしたことがない場合が多く、施設として主催し、ここでの体験的の中で感じた水の特性、楽しさや危なさ、どんな準備が必要なのかを学び、これからの人生で活かしてほしいという思いがある。

5. 宿泊を伴う川遊びでの具体的な準備、設備

～事前の想定～

5歳児という成長段階の子どもたちの成長特性を把握しておくことは当然だが、宿泊を伴う水辺の活動については天候等により大きく危険度が変化する可能性を想定する。このため、入念な現地の下見と想定が必要となる。

川であればその溪相、流れの強さ、水深、透明度、待機場所になる河原があるか、上流のダムの有無、川面から宿泊場所までの高さ、緊急時に搬送できる医療機関の有無など様々な想定を参加する職員皆で行うことが重要になる。（付随して、宿泊場所の衛生面、空調があるか、衛生的に調理ができるか等も確認が必要）

6. そして、「何もないこと」の大切さ

「何もないこと」は当たり前ではない。水難事故で、特に施設側が事故起こってからいうのは「今までは何もなかったのに」ということだ。

これは運でしかない。「何もない事」はその想定がきちんとなされ、準備と配慮を行うからで運任せではない。そういった意味では、「事故は起こって当たり前」と思い、そのことを重く恐怖に感じて対策しておくことが必要だ。反面、「そんなに危険だったらやらない」という安全第一の選択肢ももちろんあるし、そうであっていいこともあると思う。ただ、その機会を幼児期教育の中で大事な学びだと思えば、教育者は真剣に想定し備えて楽しく大切な学びを提供することも必要だ。だから安全を前提に「何もなかった」を誇りにしたい。